南の光明

The Catholic Diocese of Naha Newsletter

今年の教区の目標

交わり深め 力あわせ
救いのおとずれ広げよう

〒902-0067　那覇市安里3-7-2
カトリック那覇教区本部
TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474
発行人　W.F.バーント司教　1部40円
http://www.naha.catholic.jp/

復活祭メッセージ

深い闇にかがやく光

カトリック那覇教区長　ウェイン・バーント司教

†ちむがなさ

兄弟姉妹の皆さん、ご復活おめでとうございます！ 年ごとに祝うご復活祭ですが、毎回あらたなメッセージに触れることが出来ます。二千回以上も主のご復活を祝ってきたわたしたち教会共同体は、この祝祭で何を受けとめ、何を表現し、何を伝えてきたのでしょうか。原点に立ち返ってその意味を今一度確認し、その深い喜びを分かち合いたいと思います。

イエス様の十字架上の死に直面した弟子たちやその他の従う者たちは、絶望の淵に立たされ、自らにも迫るかもしれない死の恐怖におびえていました。そんな中、イエスに従うご婦人たちは、受難にあえぐイエス様からも離れることなく、安息日の始まる直前で取り急ぎ納められた墓にまでついて行き、安息日があけた朝早くに、誠意を尽くしてご遺体を丁重に葬るために香油をもって墓を訪れます。その時点では、主イエスの復活を信じる者はだれもいませんでした。

ただ、ご遺体がない事実と「人の子は必ず、罪びとの手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっていると言われたではないか。」（ルカ二十四・7）との天使のことばだけが彼らの中に深く残ったのでした。

あれほど幾度となく、はっきりとイエス様からその死と復活を伝えられていたにもかかわらず、それでもすぐにはこれらの出来事が神の救いの業とは、理解できなかったようです。その無理解を福音書は「家に帰って行った」という表現で伝えています。「家に帰る」ということは、イエスに出会って「家を出る」（ルカ十八・28、創世記十二・1）こと、つまりイエスに従って歩むことを止め、元の生活へと後戻りすることを示唆しています。イエスの死と復活がすべての人（人祖からまだ見ぬ未来の人まで）に永遠のいのちをもたらす出来事とは気が付かなかったからです。

今では、毎年最も盛大に祝われる主イエスの復活祭ですが、当初は、十字架刑による一人の罪なき者の死とその死に立ち会った小さき者たちの小さな愛の行いに伴う、ご遺体喪失という少し驚くような体験に過ぎなかったようなのです。

しかしその後、時間をかけ、イエスに出会った多くの人の分かち合いの中で、そこに働く聖霊の導きを通して、この出来事こそは創世記に記され、幾世代にもわたって受け継がれ、待ち焦がれていた神との約束の実現、神の救いの業そのものだと確信していったのでした。

このようにして次第にイエスの死と復活こそは、実在したナザレのイエスが救い主キリストであり、神の約束、救いの業の成就そのものであること、そして、この事実こそは、救いにあずかるものの集い（教会）の原点であり、神の恵みの源泉、救いの歴史の頂点、その実現そのものであることに気付いていったのです。

こうして教会は、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」（マタイ十八・20）という主イエスのみことばに従って、主イエスの死と復活という事実に秘められた人間の理解を超えた救いの神秘を伝え続けるために、復活祭という祭儀をかたちづくり、また信じる者の集いの中で時空を超えた霊的な事実として再現するためにミサ聖祭として伝えてきたのです。

ですからこの祭儀は、いわゆる歴史絵巻のような過去の出来事の模倣や記念式典ではなく、時間空間を超えて、過去・現在・未来を生きるすべての人のために死を受け、復活し、生きてそのいのちを与え続けるイエス様の存在そのものを現在化するのです。

ところで、今年も復活祭で入信の秘跡、洗礼・堅信・聖体をお受けになる那覇教区の新しい兄弟姉妹がいます。皆さん、おめでとうございます。皆さんは、秘跡によってキリストの死からの復活という過ぎ越しの神秘に与かり、古い人に死んで新しい人に生まれ変わります。でも、私たちの目にできる物質的現実は何も変化したようには感じられないかもしれません。相変わらずの日常の中で、相変わらずの私がいて、苦しいことも悲しいことも小さな楽しみも変わることなく、神の子に相応しくない愛の足りない自分に度々がっかりしてしまいます。でも、それでも私たちは秘跡という確かなしるしによってキリストに結ばれ、神の子としての生まれ変わっていくのです。

その霊的な事実にすぐには気付けなくても、また自分ではなかなか感じ取ることが出来なくとも、弟子たちと同じように信じる者の集いの中で『共に歩むこと（シノダリティー）』を通して、自分の中に始まった主イエスの救いの業に徐々に徐々に気付いて行くのです。ですから、どんな状況にあっても決してうつむいて歩まないでください。自分の中に灯されたキリストの光に気付いてください。そして、どんなに小さな光であっても、その光を高々と灯し続けてください。あなた方のうちに灯されたキリストの復活の光があなたとあなたの周りの人を照らし、温め、導いてくださいます。

「光は暗闇の中で輝いている」（ヨハネ一・5）。闇が深ければ深いほど、どんなに光が小さくともその輝きは増します。パンデミックなどの様々な災禍や戦乱の深い闇にこそ、あなたの信仰の光は必要とされ、より輝きを増すのです。さあ、小さな親切を差し出して、どんな小さなことにも愛を込め、光の子としてあらゆる出会いを復活の光で照らし、温め、共に歩みましょう。

2022 Bishop's Easter Message

"The light shines in the darkness, and the darkness has been unable to overcome it."
(John 1:5)

Brothers and Sisters of Naha Diocese,

Happy Easter to all of you! I hope that the Risen Lord will grace each of you with the heavenly gifts of peace, joy, and forgiveness during this Easter Season. As you may remember, at each of the Easter appearances of Jesus after his resurrection, he not only forgave the failings or transgressions of his disciples but he also gave them needed spiritual gifts as well. Jesus replaced the doubt of Thomas with a solid faith during one of these appearances. Jesus took away the hurt that Peter felt after betraying his Lord and replaced it with a knowledge that he had been forgiven during another appearance. And Jesus took away the fear of the authorities from the other disciples and replaced it with feelings of joy and peace at the sight of the Resurrected Jesus. The presence of the Risen Jesus, always meant that the disciples experienced forgiveness, and at the same time, they were also filled with the very spiritual gifts that they needed.

Our Catholic faith works in this way. Our faith is a light that shines in the darkness and it is a force that darkness cannot overcome. The darkness could be war, it could be a pandemic or it could be any evil that we experience in the world, either as a community or as an individual. Our faith tells us that whatever the darkness may be, the shining light that is the presence of Jesus in our lives, cannot be overcome by any evil that we may experience. In fact, the presence of Jesus in our lives is the spring from which peace and joy, as well as other spiritual gifts, flow into all that we think, say, and do.

There is currently a lot of worry and uncertainty about the war between Russia and Ukraine. Pope Francis recently asked for the bishops around the world to pray for peace and specifically asked that a prayer of consecration of Ukraine and Russia to the Immaculate Heart of Mary be said on March 25th. I did say this prayer at the Sisters' Fiat Convent in Urasoe not only for Ukraine and Russia but also for Naha Diocese and for all our brothers and sisters in Asia as well, especially those suffering in Myanmar. The prayer that I said implored the Blessed Mother to help us to end all wars and to give us peace. I especially prayed for peace in Okinawa.

Here is part of the prayer, "Act of Consecration to the Immaculate Heart of Mary," that the Pope prepared for us.

"Therefore, O Mother hear our prayer.
Star of the Sea, do not let us be shipwrecked in the tempest of war.
Ark of the New Covenant, inspire projects and path of reconciliation.
Queen of Heaven, restore God's peace to the world.
Eliminate hatred and the thirst for revenge, and teach us forgiveness.
Free us from war, protect our world from the menace of nuclear weapons.
Queen of the Rosary, make us realize our need to pray and to love.
Queen of the Human Family, show people the path of fraternity.
Queen of Peace, obtain peace for our world."

Brothers and Sisters, each one of us needs to be a "light shining in the darkness" of our world. The Risen Lord showed us how to do it by the way he lived and how he interacted with his disciples after his resurrection. Mary in imitation of Jesus, lived her life as a sign of reconciliation and peace. And now it is our turn to follow Jesus, like Mary did, with all our heart and soul. There is too much darkness in the world now. However, if we all join our hearts together, we can create a climate of hope, by being a source of light in our families, in our churches and in our world. In Christ, we can all become a light shining in the darkness. Have a Blessed Easter. May God bless you and keep you all safe and healthy.

BishopWayne

ニヌファ☆ヌ

復活の信仰

ロドニー・モンデッドー神父
首里教会　主任司祭

復活がなければ、私たちの信仰に何の意味があるでしょうか？

私たちはクリスチャンとして、キリストが死者の中から復活されたことをおおやけに宣言します。私たちも、又、死者の中から復活して永遠の命を生きるものとなるのです。

日曜日ごとに、私たちは信仰宣言でもって、私たちの信仰を告白します。今日、私たちはイエスが復活されたことを記念して祝います。

さて、復活は私たちの信仰の中心となるものですが、新約聖書の中のどこを見ても、イエスの復活についての詳しい記述は見当たりません。一度死んだ人が蘇るということは、弟子たちにとっても信じ難いことであったに違いありません。それは、イエスが復活されたという知らせを受けた弟子たちが、最初のうちは半信半疑であったことからも分かります。

聖書によると、墓から石が取りのけてあるのを見て、マグダラのマリアはイエスのご遺体が何者かによって盗まれたと思いました。

ペトロはイエスの頭を包んでいた布が離れたところに丸めてあるのを見ました。

エマオへ向かっていた二人の弟子のように、復活された主に実際に出会ったと言うものもいました。

天使たちが現れ、イエスは生きておられると告げた、と言うものもいました。

そのように、イエスの復活についての情報が錯綜する中で、人が何と言おうとも、イエスの手に釘の跡を見、自分の指を釘跡に入れてみなければ、イエスの復活を決して信じないと言う弟子もいました。

弟子たちは、イエスが死者の中から復活することになっていると聖書に書いてあることをまだよく理解していなかったのです。

イエスの復活を証明することは確かに難しいことです。福音史家たちは、イエスの復活については、その史的根拠を提供することよりも、むしろ、人々の中にあり、人々の心を大きく動かしている存在として、復活されたイエスを描いています。復活されたイエスによって、多くの人はキリストを信じる者、クリスチャンになりました。教会の始まりです。

復活を信じることには、人の生きかたを根底から変えてしまう力があります。イエスの復活は希望をもたらしました。それはすべてを変えるものでした。

例えば、マリア・マグダレナは、多分、イエスに最後の別れを言いたかったのでしょう。墓へ行きますが、そこで、復活された主に出会うことになります。

エマオへ向かっていた二人の弟子は、イエスが亡くなってしまったので、イエスによってイスラエルが解放され、イエスがイスラエルの王という栄光の座につかれる望みを失い、大変落ち込んでいました。イエスは希望を失って途方に暮れていた彼らの心に再び火をつけられます。そして、彼らに、救い主が苦しみを受けた後にくるより大きな栄光、イスラエルの王になる事などとは比べ物にならない栄光について話されます。復活によってイエスは全人類の王となられるのです。エマオへ行く二人の弟子の心に燃え上がったと同じ炎が、今日でも多くの人の心に燃え上がり、多くの人々を神の栄光のために働くことへと駆り立てます。

その一方で、多くの人の心の火は消えたままで、再び火がつけられるのを待っています。すべての人はイエスが復活された事を知らなければなりません。なかでも、希望を失っている人々と、この世の魅力に取りつかれ、それから離れられなくなっている人は、特にイエスの復活のことを知らなければなりません。

イエスの復活の力によって、私たちが自分の生き方をあらためることができますように。そして、私たちそれぞれが、その生き方を通して、イエスが復活され、生きておられることを、人々に示す者となりますように。復活を信じることによって、私たちがより良いクリスチャンとして、人々に希望を運ぶものとなりますように。それらのことを願って祈りましょう。

主の復活、おめでとうございます！

2022年度

那覇教区女性の会・新年の集い

講　師：ウェイン・バーント司教
日　時：2022年4月23日（土）
　　14時～講話
　　15時ミサ（自由参加）
場　所：カトリック安里教会
※どなたでも参加できます。歓迎いたします。
主　催：那覇教区女性の会

2022年3月拡大司祭・助祭会議議事録

開催日時：2022年3月1日（火）、会議前に安里教会聖堂にて朝の祈りとベネディクションを行う。

1. 報告及び連絡事項：始めの祈りと司会はマキシム神父が担当。

・前回（2月ズーム会議）の議事録の確認を新田が行い、承認をされた。

・新しい長崎大司教着座式の報告がウェイン司教より行われた。那覇教区は長崎教会管区に属しており、ウェイン司教も長崎で着座式に参列された。補佐司教の任にあった中村司教が高見大司教の後任に選ばれ、日本の司教団もほぼ全員が参加して行われたことが報告された。中村大司教が新しい風を吹かせてくれることを期待し、お祈りしたいと結ばれた。

・仙台教区の新しい司教に任命された淳心会のエドガル・ガクタン被選司教の叙階式についても、ウェイン司教から報告が行われた。3月19日に叙階式が行われるが、ウェイン司教は通院の日程が先に入っているので、今回は参列されないことが報告された。

・カリタス四旬節キャンペーンついて、担当のマーシーさんから報告が行われた。毎年四旬節献金とカレンダーを各小教区宛配布してあるので、よく活用して、四旬節の意義を活かせるよう呼びかけと協力依頼が行われた。

・「教区の日」の各小教区での取り組みについて、ウェイン司教から報告が求められ、各主任司祭から小教区でのミサの様子が報告された。報告の最後に、成人式も教区の日に祝ってはどうかとの提案も出され、今後の教区の日の持ち方も含め継続審議されることとなった。なお、開南教会で叙階60周年の記念を祝われた有馬神父が3月1日からホームへ入所されることが合わせて報告された。

・2月に行われた定例司教総会の決議事項について、ウェイン司教より報告が行われた。

1）新しい日本の司教協議会会長に東京大司教区の菊地功大司教が選ばれ、副会長に横浜教区の梅村昌弘司教が選出され、ウェイン司教は正義と平和協議会の責任司教に選ばれた。

2）「女性と子どもの権利擁護」のための新しいガイドラインが出された。

3）アジア司教協議会50周年の式典と会議が来年予定されており、ウェイン司教を含め7名の司教を日本から派遣したいとのことだが、この集いが1ケ月以上の長期に渡るので、ウェイン司教はズームでなら参加したい意向であることを報告された。

4）国際聖体大会への派遣担当司教は、さいたま教区の山野内倫昭司教と福岡教区のヨゼフ・アベイヤ司教に決定された。

5）新しい「ミサの式次第」は決定され、新しい式次第が出版されるので、出版を待って、待降節第一主日からの導入に向けて準備を進められたい。

6）コロナ禍や様々な要因が重なり、献金、維持費の減少が続いているので、司教団のためにもお祈りをお願いしたい。

7）日本青年大会 in横浜について、引き続きウェイン司教から説明が行われた。通常、ワールド・ユース・デーの後に行われる集いであるが、コロナ禍のため開催できなかったので、今年できないかという意見が出ている。開催の可否は4月に決定されるが、若者たちのためにお祈りお願いしたい。

・フィリピン台風災害支援の募金についてマーシーさんから報告が行われた。合計で60万円余の義援金が集まったので、被災地で活動されている ONDのシスター達とネルソン神父に折半して送付し、被災地で役立ててもらえるよう意向を伝えた。後日現地から報告があるとのことである。

・3･18性虐待被害者のための祈りと償いの日について、ウェイン司教から報告された。日本の司教団の総意として、四旬節第二金曜日のミサを、この意向で捧げられるよう依頼され、朗読箇所は当日の通常のミサの朗読箇所を使うよう指示がなされた。

・3･25神のお告げの祭日に、「すべてのいのちを守るため」のミサが捧げられるよう依頼がある。プロライフとの関連で、パレードをしたいとの声も寄せられているが、沖縄戦の体験者は様々に心の傷を負っていて、微妙な問題がある。「ぬちどぅ宝」の心を持ってミサを捧げ、命の尊さについて説話するよう要請された。司教は大罪についても司祭たちにゆるしの権限を付与するので、神のあわれみと慈しみに信頼してゆるしを与えて欲しい、との話があった。押川名誉司教も発言し、寛大な心でウェイン司教の指導に従い、イエスの眼差しを持って信徒と接するようお話された。

・その他

1）今年もコロナ禍にあり、大きな移動は考えていない旨司教から報告が行われた。

2）学校法人の評議員の増員が必要になるので、司祭たちへの協力依頼が行われた。

2. 審議事項

・ウェイン司教からコロナ禍に関連して、司祭たちには毎日のミサ前の検温を徹底して、発熱が認められた場合はミサを休んで、司教へも報告するよう依頼があった。ミサの時間や聖歌斉唱についても聞き取りが行われたが、概ね元に戻したい意向が司祭たちからは述べられたが、信徒会役員とも相談して決めて行くよう司教から指示があった。司祭たちには県外へ出かける際は必ず PCR検査を受けることや教会でのマスク着用、37度以上の発熱の際はミサを司式しないよう合わせて要請された。四旬節の黙想会も行われると思うが、十分気をつけて行うよう要請があった。

・教区シノドスについて、担当のマイケル神父から4月5日(火) 必着で送るか、その日は司祭会議の日なので分かち合いの結果を直接手渡すよう依頼があった。5月3日(火) は午前中に司祭助祭拡大会議を行い、午後2時から安里教区センターで教区シノドス前会議を行うことが決められた。教区シノドスに向けて、分かち合いの方法等を小教区宛送ってあるので、それを参考に小教区で復数回分ち合いを行い、小教区としての意見をまとめるよう改めて要請がなされた。

・2021年の教区教勢報告書と2022年予算計画について、津波古さんが欠席のため、事務局から説明と、提出がまだのところは早目に送るよう要請が伝えられた。

・その他

3・11には東日本大震災被災者のためにお祈りするようウェイン司教から要請がなされた。

・次回拡大司祭・助祭会議は2022年4月5日(火) 午前10時から12時、安里教区センターで行なわれることが報告された。

2022年3月22日　承認: ウェイン・フランシス・バーント司教　記録: 新田　選

シノドスの準備を進めましょう

教皇庁シノドス事務局の書簡(二〇二一年十月二十八日付)により、各国司教協議会の回答を教皇庁に送る締切(教区フェーズ)が二〇二二年四月末から、同年八月十五日に延長されました。これに合わせて、日本の各教区から司教協議会への意見書の提出期限も、二〇二二年六月四日に変更されました。

シノドス的教会は、福音を告げながら、「ともに旅をする」ということは、今日、みなさんの教会の中で、どのような形で起こっているでしょうか。わたしたちが「ともに旅をする」中で成長するために、霊は、わたしたちがどのような段階を踏むよう招いているでしょうか。

今回のシノドスのテーマは、「ともに歩む[=シノドス的]教会のため—交わり、参加、そして宣教」です。教会にゆだねられた使命に従って福音をのべ伝える教会の刷新のため、それぞれの現場で、聖職者、修道者、そして信徒がどのような経験をし、困難に遭遇し、どのように霊に導かれているかという声を、世界中から集めていきます。

最終的に、二〇二三年十月のローマでの総会に向け、世界中で準備を進めるという、長いプロセスを歩むこととなります。

那覇教区では各小教区からの意見提出を受けて、五月三日(火)午後一時より、教区センター(安里)にて代表者会議を開催。教区としての意見をまとめて日本の司教協議会に提出致します。

仙台教区

エドガル・ガクタン司教叙階式

教皇フランシスコは、これまで空位が続いていた仙台教区の司教として、エドガル・ガクタン師(EDGAR GACUTAN) 淳心会を任命、3月19日(土)に、カトリック仙台司教区センター 元寺小路教会大聖堂において、東京大司教区菊地功大司教の主式で、エドガル・ガクタン師の司教叙階式が執り行われた。仙台教区の新しい司教様のためにお祈り致しましょう。

Caritas Japan
ウクライナ危機
人道支援募金

Book カトリック文化センターからお知らせ

いつも当センターをご利用頂きありがとうございます。2月21日から3月12日の期間、当センターにおいて、「ミニのみの市」を開催しましたところ、多くの方々にご来店頂き、様々な交流ができましたことを感謝します。売上金はカリタス・ジャパンを通して「ウクライナ危機人道支援」に寄付させていただきました。ご協力ありがとうございました。(﨑山)

たて軸よこ軸

日本最南端の教会で・・・

石垣教会　ヤコブ 平良 守弘

沖縄本島から約四百キロ離れたカトリック石垣教会は、一九五三年（昭和二十八年）聖母マリアの年に、オーバン神父様が初代の主任司祭として赴任し、初めてのミサが捧げられました。その後、一九五五年にカトリック石垣教会が完成し、教会を利用して海星幼稚園が開園、四年後には隣接して幼稚園園舎も完成しました。

続いて、一九六四年に海星小学校が開校するのですが、その前年に私が二歳の頃、沖縄本島から石垣島へ移り住んだのが私たち家族です。母は、新しい土地で生活が一変した厳しい境遇の中、一生懸命働きながら、当時の伝道師有馬御夫妻から指導を受けて、ペトロ神父様に洗礼を授かり、同時に兄と私も幼児洗礼を受けたのです。

当時は、石垣島の新天地で慣れない環境と貧しくて厳しい環境の中でも母は、公教要理を勉強し、聖書を読んでカトリックという信仰への道を歩み始めました。四人の息子を海星幼稚園、小学校と卒業させたのは、教会と一緒に歩み、信仰生活への強い想いと子どもたちへの教育に掛ける熱い気持ちの表れだったと感じます。

お陰で、兄は海星小学校一期生、私は五期生、弟たちも八期、十二期と続きました。私は、小学校高学年になると週に一回の楽しみがありました。それは、早朝の御ミサの侍者当番をする日があり、同級生と二人で前日の夕方から司祭館に宿泊出来ることでした。

司祭館に侍者が宿泊できる畳間一室があり、宿題を済ませ、大広間で公教要理等の勉強会をしている信徒のみなさんを横目に、同級生と部屋でトランプ遊びをしたり、また床に入りながら、おしゃべりした事は、五十年経った今も同級生と話題になる楽しい思い出です。早朝ミサの侍者を務め、朝食はトーストにペトロ神父様自慢のハムエッグやスクランブルエッグでした。デザートも大きな業務用アイスクリームボックスからアイスクリームデッシャーですくうバニラやストロベリー味のアイスがとても楽しみでした。侍者の経験は、私の息子たちや甥っ子たちにも受け継がれ、聖家族としての幸せを一番感じているのは、母ではないかと思います。

現在は、コロナ感染症というパンデミックの中、教会ではマスク着用の徹底、聖歌斉唱は無くなり、ミサ終了後の楽しみだった会食やおしゃべりも禁止となりました。母もミサ後の会食やおしゃべりが無くなり、明るく朗らかな性格の母には、耐える日が続いています。

また、この期間に、シノドス（ともに歩む）教会のため―テーマは「交わり、参加、宣教」ですが、教会の中で話し合い、参加することで成長し、教会の教えを広げていこうということです。このような気持ちを持つことは、シノドス期間に分かち合いが出来たことで一つの共同体としての気づきなったと思います。

コロナ禍の中、この二年間はミサが休止したり、時間差によるミサの対応だったりと大変な時期を過ごしましたが更なる分かち合いから大きな団結が生まれ、「ともに歩む」ことを普段から認識していくことで成長していく事を感じたのは、私だけでは無いと思います。

三男（秀司）の初聖体の記念写真　後列中央は第4代主任司祭ペトロ神父様
向かって右から２番目ヨハネ平良秀司現信徒会長　背後にクララ平良葉子（昭和48年）

こういう分かち合いのあるカトリック石垣教会ですから、今年九十二歳を迎える母は、毎週の教会は欠かさず、前列左側指定席で御ミサに与かれる幸せを感じています。母を熱い信仰生活へ向かわせた、当時の有馬伝道師ご夫妻の指導や海星小学校創立者のペトロ神父様やシスター達との出会いがなければ、幸せな生活が生まれなかったと感じています。

また、母は大変な時期に石垣島に来て、「人生にはどうしようもない事があるけれども今の幸せを神様に感謝している」と話しています。また、「神に感謝、われに平和を与え給え」と毎日祈っていますし、現在はひ孫達と同じ屋根の下で一緒に暮らし、幸せな日々を送っています。

幼稚園、小学校ともに教会に見守られながら、また子どもたちも毎週の礼拝日やクリスマス等、教会と共にまた身近に感じながら毎日を過ごしています。

小学校新校舎は、二〇一七年に五十周年記念事業として、幼稚園は今年の三月に木のぬくもりを感じる木造平屋の素晴らしい新園舎が完成します。

ぜひ、日本最南端の教会「海の星なる聖母マリア」のカトリック石垣教会へ足を運んでください。お待ちしています。

教皇フランシスコは、聖母の取り次ぎによる平和を求めて、去る3月25日(金)神のお告げの祭日のローマ時間午後5時(日本時間3月26日午前1時)に、聖ペトロ大聖堂において、ロシアとウクライナを聖母マリアの汚れなきみ心に奉献されました。

ロシアとウクライナをマリアの汚れなきみ心に奉献する祈り

神の母、わたしたちの母マリアよ、この苦難の時、あなたにより頼みます。母であるあなたは、わたしたちを愛し、わたしたちのことをご存じです。わたしたちが心に抱くことは、何一つあなたに隠されていません。いつくしみ深い母よ、わたしたちはあなたの優しい計らいと、平和をもたらすあなたの存在をたびたび経験してきました。あなたはいつも、わたしたちを平和の君であるイエスのもとに導いてくださるからです。

しかし、わたしたちは平和の道を見失いました。わたしたちは前の世紀の悲劇の教訓を忘れ、世界大戦の犠牲となった数えきれないほどの死者のことを忘れてしまいました。国際的な共同体として交わした約束を無視し、人々の平和への夢と若者たちの希望を裏切りました。わたしたちは欲望に取りつかれ、国益の中に閉じこもり、心は無関心によって渇き、利己主義によって麻痺してしまいました。神を無視し、偽りとともに生き、攻撃する心をかき立て、いのちを消し去り、武器を蓄えることを選び、隣人と共通の家を守るべき者であることを忘れてしまいました。戦争によって地球の庭を荒廃させ、わたしたちが兄弟姉妹として生きることを望まれる御父のみ心を、罪によって傷つけてしまいました。わたしたちは、自分以外のすべての人や物事に無関心になってしまいました。そして、恥ずかしながらこう叫びます。「主よ、おゆるしください！」

聖なる母よ、悲惨な罪の中で、疲れと弱さの中で、悪と戦争という理解しがたい不条理の中で、神はわたしたちを見捨てることなく、愛のまなざしを注ぎ続け、わたしたちをゆるし、再び立ち上がらせようと望んでおられることを、あなたは思い出させてくださいます。神はあなたをわたしたちにお与えになり、あなたの汚れなきみ心を教会と人類のよりどころとしてくださいました。神の恵みによって、あなたはわたしたちとともにいて、歴史の最も厳しい曲がり角においてもわたしたちを優しく導いてくださいます。

わたしたちはあなたにより頼み、あなたのみ心の扉をたたきます。あなたは、愛する子であるわたしたちをいつも見守り、回心へと招いてくださいます。この暗闇の時、わたしたちを救い、慰めに来てください。わたしたち一人ひとりに繰り返し語ってください。「あなたの母であるわたしが、ここにいないことがありましょうか」と。あなたは、わたしたちの心と時代のもつれを解くことがおできになります。わたしたちはあなたに信頼を寄せています。とくに試練の時、あなたはわたしたちの願いを軽んじることなく、助けに来てくださると確信しています。

ガリラヤのカナで、あなたはイエスの執り成しを促し、イエスの最初のしるしを世界にもたらしてくださいました。婚宴の祝いが悲しみに変わった時、あなたはイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」(ヨハネ 2･3)と言われました。御母よ、神にそのことばをもう一度繰り返してください。今日、わたしたちに希望のぶどう酒はなくなり、喜びは消え去り、きょうだい愛は水を差されてしまったからです。わたしたちは人間性を見失い、平和を壊してしまいました。あらゆる暴力と破壊を可能にしてしまいました。わたしたちは、あなたの母なる助けを直ちに必要としています。

母マリアよ、わたしたちの願いを聞き入れてください。
海の星であるマリアよ、戦争の嵐の中でわたしたちを難破させないでください。
新しい契約の櫃であるマリアよ、和解への計画と歩みを奮い立たせてください。
「天の大地」であるマリアよ、神の調和を世界にもたらしてください。
憎しみを消し、復讐をしずめ、ゆるしを教えてください。
わたしたちを戦争から解放し、核の脅威から世界を守ってください。
ロザリオの元后、祈り愛することが必要であることを呼び覚ましてください。
人類家族の元后、人々にきょうだい愛の道を示してください。
平和の元后、世界に平和をお与えください。

わたしたちの母よ、あなたの嘆きが、わたしたちの頑な心を動かしますように。あなたがわたしたちのために流した涙が、憎しみで涸れる谷に再び花を咲かせますように。武器の音が鳴りやまない中で、あなたの祈りがわたしたちを平和に向かわせますように。あなたの母なる手が、度重なる爆撃によって苦しみ、逃げまどう人々に優しく触れますように。あなたの母なる抱擁が、家と祖国を追われた人々に慰めを与えますように。あなたの苦しむみ心が、わたしたちのあわれみの心を動かし、扉を開き、傷つき見捨てられた人々のために尽くす者となりますように。

聖なる神の母よ、あなたが十字架の下におられたとき、イエスはあなたのそばにいる弟子を見て、「御覧なさい。あなたの子です」(ヨハネ 19･26)と言われました。こうしてイエスは、わたしたち一人ひとりをあなたにゆだねられました。そして、イエスは弟子に、すなわちわたしたち一人ひとりに、「見なさい。あなたの母です」(同 19･27)と言われました。御母よ、わたしたちは今、あなたをわたしたちの人生と歴史の中にお迎えしたいと願っています。今この時、疲れ果て、動揺した人類は、あなたとともに十字架の下に立っています。そして、あなたに信頼し、あなたを通してキリストに自らを奉献したいと望んでいます。愛をもってあなたを崇敬するウクライナとロシアの民は、あなたにより頼んでいます。あなたのみ心は、彼らのために、そして戦争、飢餓、不正義、貧困によって殺されたすべての人のために鼓動しています。(8頁へ続く)

神の母、わたしたちの母よ、あなたの汚れなきみ心に、わたしたち自身を、教会を、全人類を、とくにロシアとウクライナを厳かにゆだね、奉献いたします。わたしたちが信頼と愛を込めて唱えるこの祈りを聞き入れてください。戦争を終わらせ、世界に平和をもたらしてください。あなたのみ心からあふれ出た「はい」ということばは、歴史の扉を平和の君に開きました。あなたのみ心を通して、再び平和が訪れると信じています。あなたに全人類の未来と、人々の必要と期待、世界の苦悩と希望を奉献いたします。

あなたを通して、神のいつくしみが地上に注がれ、平和の穏やかな鼓動がわたしたちの 日常に再び響きますように。「はい」と答えたおとめよ、聖霊はあなたの上にくだりました。わたしたちの間に神の調和を再びもたらしてください。「ほとばしる希望の泉」であるマリアよ、渇いたわたしたちの心を潤してください。人類をイエスに織り込んだマリアよ、わたしたちを、交わりを作り出す者としてください。わたしたちの道を歩まれたマリアよ、平和の道へと導いてください。アーメン。

退職にあたって…感謝

与那原教会　新川　博子

私事で大変恐縮ですが、この度三月末日をもちまして、カトリック文化センターを退職致しました。皆様お一人お一人に、直接お礼のご挨拶をと思いましたが、紙面をお借りしてのご報告、失礼いたします。

あっという間の八年間でした。在職中、皆様には言葉を尽くしても言い表せない程、大変お世話になりました。振り返れば、これまであらゆる場面で皆様に、助けられ、支えられ、たくさんの事を学ばせて頂き、恵まれた日々であったと感謝しております。

また、ラサール神父様とお仕事をご一緒させて頂けた事は、私の生涯において、忘れ難い思い出になりました。私にとりましては、掛け替えのない、温かな霊的指導者であり、また常に、霊的同伴者でもいて下さいました。

センターを通して出会った方々やひとつひとつの出来事が、今は全て喜びと感謝となって胸に刻まれております。

改めまして、皆様から頂きました温かい励ましの言葉、ご厚情に、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

尚、後任には既に﨑山利香さんが皆様のご要望に応えるべく、日々店作りに頑張っております。今後とも皆様の変わらぬご指導、ご愛顧を頂けますよう、宜しくお願い申し上げます。

訃報

◆普天間教会
ステパノ　赤塚　流也　様
二〇二二年三月十日帰天
享年三十五歳
赤塚　流華　様
二〇二二年三月十七日帰天
享年八歳

◆開南教会
ヨゼフ　金城　勝博　様
二〇二二年三月十九日帰天
享年七十一歳

◆石垣教会
ヨハネ　宮良　一　様
二〇二二年三月二十四日帰天
享年七十五歳

NPO法人ぶどう園の会
訪問看護ステーション クララ
TEL&FAX:098-937-5001
住所　沖縄市泡瀬2丁目37-15
・基本受付　月曜日～金曜日(申込、相談など)
・営業時間　8:30～17:30
・営 業 日　24時間365日(緊急対応含む)

葬祭の「やすらい企画」
私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。
那覇市首里鳥堀町4-57-3
TEL&FAX:098-885-8205
http://w1.nirai.ne.jp/yasurai
E-mail:yasurai@nirai.ne.jp
24時間受付

～ご遺族の心をもって奉仕する～
葬典社(そうてんしゃ)
＊創業30数余年・・・。
＊皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。
＊ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。
「ゆうなの会」会員募集中です。
(実務担当)比嘉(ひが)　高茂(たかしげ)
24時間受付
☎098-853-1059(てんごく)